



第3回文学部フォーラムを終えて

三 木 悦 三 (文学部長)

去る12月16日(土)、文学部フォーラム『シェイクスピア万華鏡——様々な角度からシェイクスピア作品をみる』が16番教室で開催された。一昨年の『人文知の未来』、そして、昨年の『古今和歌集一千百年熊本フォーラム』に続く、文学部としては第3回目の公開フォーラムである。

法人化初年度、総入場者数140余名を数える盛況の中、プログラムは午後1時に米澤和彦学長の開会の挨拶で始まり、フォーラム基調講演として大谷大学助教授芦津か



講演風景・芦津氏

おり氏が「日本の『ハムレット』受容——その多様な変貌」の演題で、特に『ハムレット』に焦点を当てながら、江戸末期から今日に至るまでのわが国におけるシェイクスピア受容の実態とその変遷について小1時間にわたって講演された。女史によれば、日本の『ハムレット』受容は5期に分けることができる由で、まず、『ハムレット』がわが国に紹介される第1期、本邦初出のシェイクスピアは「シャーケスピール」の名前で当時の文献に現れるとのこと、そして、明治維新を経て『ハムレット』が翻訳されると、これが明治の文学界を席卷する。「永ろうべきや逝くべきや」——この問いが近代精神の模索を象徴するかのようによせられることになる。

『ハムレット』受容はまもなく演劇界にも及び、その翻案が世に出るのが第2の受容期、仮名垣魯文作の『葉武列士倭錦絵』（1886年）ではハムレットは葉叢村丸という武士に仕立てられ、ストーリーも武士社会の仇討ち物に改作される。（この作品は、しかし、翻訳から100年後、平成の世に至って初めて上演された由。）その後、大正から昭和期にかけての第3期は『ハムレット』が日本の文士たちに静かに受容されていった時期に当たるとのこと、なるほど、志賀直哉の『クローディアスの日記』、小林秀雄の『オフィーリア遺文』、太宰治の『新ハムレット』等々、いずれもわたしたちにも親しみのある作家連がシェイクスピアを読み、触発されて作品を創作するのである。やがて、太平洋戦争の勃発、そして、敗戦。いわゆる戦後日本の『ハムレット』事情を芦津女史は第4期「みんなの『ハムレット』」と命名される。いまや『ハムレット』は急速に大衆化してゆく。この時期には英文学者の福田恒存、ややあって小田島雄志、の翻訳など忘れがたい。文学作品としては大岡昇平の『ハムレット日記』が刊行されている。演劇界では蜷川幸雄演出の『ハムレット』が海外でも高い評価を得たことはわたしたちの記憶に新しい。また、黒澤明監督の映画『悪い奴ほどよく眠る』が『ハムレット』を下敷きにしているとの指摘など興味深く拝聴した。そして、最後に第5期、1980年代以降の「国際化した『ハムレット』」の受容期であるが、これは多くを記すまでもないであろう。——かくして、今日、『ハムレット』はあたかも人類の遺産として共有され、さまざまな文芸創作のテンプレートを提供するに至っている。講演を終えるに際して芦津氏は「英米人か否かを問わず、様々な学問的・文化的・歴史的背景をもつ人々が、過去・現在にわたって見出してきた千万億のシェイクスピア像の織りなす総体こそが、フォーラムのタイトルの「シェイクスピア万華鏡」であると言うこともできるだろう」と総括された。長い人間の歴史と文化の伝播に思いを馳せるとき、シェイクスピアの作品がどのよ

うにわが国において受容され、そして、定着したか—これは諸文化の未来を展望するひとつの視角を与えてくれるように思われる。

続けて、文学部総合文化・教職部門の難波美和子助教授による「シェイクスピアを観光する」と題された映像の紹介が行なわれた。シェイクスピア生誕の地ストラットフォード・アポン・エイボン (Stratford-Upon-Avon) の風景を始め、グローブ座 (Globe Theatre)、シェイクスピア作品ゆかりの土地等々—最新の映像に懇切な解説が添えられた。

英語英米文学科の清水啓子助教授は「認知言語学から見たシェイクスピア」の演題で、まず認知言語学とその方法を導入的に概述した後、シェイクスピアの『マクベス』に見られるメタファー (隠喩) 表現について認知言語学的な観点からコメントを加えられた。女史によれば、『マクベス』には「人間は植物」(つまり、人間が植物に見立てられている)、さらに「国家は人間」「人生は舞台」等々、実にゆたかなメタファーが盛り込まれているとのこと、「思えば長いこと生きてきたものだ、おれの人生は黄ばんだ枯葉となって風に散るのを待っている」(第5幕第3場)「人生は歩き回る影法師、あわれな役者、舞台の出のあいだだけ大威張りでわめき散らす、幕が下りれば沈黙の闇。たかが白痴の語る一場の物語だ」(第5幕第5場)。メタファーは観客の想像を飛躍せしめ、物語にポリフォニー的な彩りを与える。思うに、それは新しい理解に到達するための方便であるとともに、聴衆を説き伏せるレトリックでもあろう。「偉大な作家は、平凡な言語使用者が使っている基本的メタファー構造を新しい組み合わせで応用し、同じ一つの対象を説明するにも様々なメタファーを重ね合わせ、対象の複雑な構造を多面的に描写する」と述べて清水氏は発表を締めくくられた。

同じく英語英米文学科の坂井隆講師は、シェイクスピア作品の視覚化という見地から『ロミオとジュリエット』の3つの上映・上演作品—フランコ・ゼッフィレリ



難波氏



清水氏

(1968年)、バズ・ラーマン (1996年)、そして、蜷川幸雄 (2005年) —を取り上げ、原作が監督や演出家によってどのように解釈され、どのような手法で造形化されているか、この点を仮面舞踏会のシーンを比較対照しながら吟味にかけられた。原作のト書きの乏しさ—これを情報量の多寡という面からマクルーハン「冷たいメディア」と呼んでいるとのこと—が却って視覚化に際しては豊かに想像力を駆使する土壌を与え、作品の造形化に無限の可能性を拓くものとなっていることが解き明かされた。



坂井氏

以上、4人の講師による発表の後、水尾文子助教授 (英語英米文学科) の司会でフロアとのQ & Aが行なわれた。時間の都合から、フォーラムにふさわしい討議に発展するまでに至らなかったのはまことに残念であったが、総じて、熱気を肌を感じさせる全体の進行で、それぞれの発表に迫力があり、終了予定時刻を大幅に超過することとなった。この日午前に行なわれた英語英米文学会年次総会の出席者もフォーラムに多数合流し、また、他大学からの参加者に加えて、高校生の姿も見受けられた。こうして4時間半余に及ぶ第3回文学部フォーラムも閉会した。



シンポジウム・左より水尾 (司会)・芦津・難波・清水・坂井の各氏

番外として、フォーラム終了後、英語英米文学科1年生による恒例のシェイクスピア劇『恋のから騒ぎ *Much Ado about Nothing*』が11番教室にて上演された。1年生にとっては11月の大学祭に続く再演であったが、なかなかの熱演で、30名近い観客の拍手喝采を浴びて、この方も盛況のうちに幕となった。終日、まさにシェイクスピアづくしであり、久しぶりに「終わりよければすべてよし All's well that ends well.」の感慨を催す一日であった。



『恋のから騒ぎ』カーテン・コール

構想から1年余り、長く辛抱の要る道のりだったが、所期した以上のフォーラムを実現することができたように思う。中心となって企画・準備を進めて頂いた徳永教授を始めとする英語英米文学科の各先生、会場設営等で世話になった学科の学生ならびに院生の諸君、そして、隅々の段取りを遺漏なく取り仕切ってくれた工藤助手、各位の労をねぎらいたい。